第三章　光る源氏の物語　紫の上追悼の秋冬の物語

［第一段　紫の上の一周忌法要］

*七月七日も（七月七日の七夕も）、例に変りたること多く（例年とは大きく違って）、御遊びなどもしたまはで（歌会や楽器演奏なども為さらずに）、つれづれに眺め暮らしたまひて（漫然と庭を眺めて過ごしなさって）、*星逢ひ見る人もなし（天の川を見上げて彦星と織姫の出逢いを見守る人も六条院には居ません）。　*「七月七日」は注に＜季節は初秋に移る。七夕の節句。詩歌を作り管弦の遊びをするのが習わし。＞とある。七夕は今に引き継がれている催事なので、当時とは中身が違うのかも知れないが、その季節感は割と分かり易い。ただ、律儀といえば律儀だが、こうして一月毎に源氏殿の様子を語るのは、規定の結論に向けて定型的に話を進めるような、何処か冷めた事務的手続き感を少なからず覚える。　*「星逢ひ」は＜大島本「星逢」と表記。牽牛星と織姫星とが逢うこと。＞と注にある。

まだ夜深う（まだ深夜の内に）、一所起きたまひて（殿は一人でお起きになって）、妻戸押し開けたまへるに（妻戸を押し開けなさると）、前栽の露いとしげく（庭先の草花が夜露にびっしょり濡れているのが）、渡殿の戸よりとほりて見わたさるれば（寝殿に向かう渡り廊下の角越しに見渡されたので）、出でたまひて（縁側にお出になって、こうお詠みになります）、

「七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見て、別れの庭に露ぞおきそふ」（和歌 41-16）

「七夕の逢ふ瀬の空に朝の露」（意訳 41-16）

*注に＜源氏の独詠歌。『完訳』は「「わかれの庭」は、二星の別れる明け方の庭。紫の上との死別を思い、八日未明の庭に落涙する意」と注す。＞とある。

風の音さへただならずなりゆくころしも（秋の風の音までが強くなって行く季節柄の中で）、御法事の営みにて（紫の上の御一周忌の準備で）、*ついたちころは紛らはしげなり（八月上旬は慌しげでした）。「今まで経にける月日よ（月日の経つ早さよ）」と思すにも（とお思いになる内にも）、あきれて明かし暮らしたまふ（殿は唖然として日を送りなさいます）。　*「ついたち」は「月立ち」で＜月始め。月の上旬。＞と古語辞典にある。

*御正日には（紫の上の御命日の十四日には）、上下の人びと皆*斎して（六条院では家人が上から下まで皆が喪に服して）、かの曼陀羅など（紫の上が標榜していた曼荼羅絵を）、今日ぞ供養ぜさせたまふ（殿はこの日にこそと奉納供養なさいます）。　*「御正日（おおんしゃうにち）」は＜御命日＞。紫の上の命日は八月十四日。御法巻二章五段に「十四日に亡せたまひて」とある。　*「斎」は「いもひ」の読みで＜精進潔斎。物忌み。＞と大辞泉にある。「精進潔斎」は＜肉食を断ち、行いを慎んで身を清めること。＞とある。が、「上下の人びと皆」が何をしたのかは私には分からない。だから、ざっと＜喪に服した＞と読んで置く。

例の宵の御行ひに（定刻の夜の殿の読経に）、御手水など参らする中将の君の*扇に（清めの御水を差し出し申し上げる中将の君の胸元に挿していた扇に）、　*「扇（あふぎ）」は、給仕する中将の君が手に持っていたとは考え難い。といって、忍ばせていたのでは殿の目に付かない。これ見よがし、か如何かは分からないが、この日に限って常とは違って胸元にでも挿していた、と考える他は無いかと思う。が、何とも分かり難く、

如何にも為にする設定、歌ありきの語り口に見えて、相当にワザとらしい。が、それでも中将の君を登場させる意図がただの思い付きで有る筈もなかろう、と心して以下の歌を読んでみたい。

「君恋ふる涙は際もなきものを、今日をば何の果てといふらむ」（和歌 41-17）

「忘れられない悲しさに、今日が忌明けに思えない」（意訳 41-17）

*注に＜中将の君の詠歌。「君」は故紫の上。「果て」は一周忌をさす。『異本紫明抄』は「我が身には悲しきことのつきせねば昨日を果てと思はざりけり」（後拾遺集哀傷、江侍従）を指摘。＞とある。この歌は、結果として殿の目に止まったが、本来はかつての主人の故紫の上に対する敬愛の情を、この一周忌に際して自分の気持として捧げ記した、という主旨らしい。主人を失った悲しみは今も変わらないので一周忌を迎えたからと言って、とても忌明けで服喪を終える気には成れない、と素直に詠んだ、と一応は見て置く。そして是を目にした殿は、中将の君の故上への忠誠心に感じ入って、自らも唱和歌を書き添えた、といった話が下に記されているということなのだろう。ただ、読者としては、この歌を認めた扇を中将の君は絶対に殿に見られまいとしたワケではなさそうだというところに、どうしても興味が涌く。中将の君は紫の上を敬愛しつつも、源氏殿の情けを、自分の栄誉として受け入れていたのであり、殿も上への傾倒とは別にこの若女房を可愛がった。もし、中将の君が殿にこの歌を故意に見せたのなら、上に対する引け目から、殿との関係の清算を切り出した、という意図を勘繰ることも出来る。そして、もしそうなら殿の唱和は、上に対しては女房同様に自分も悲しいという歌筋だとしても、それは同時に女房に対しては清算に同意する返歌、という意味になってくる。

と書きつけたるを（と詠歌が書きつけてあるのを）、取りて見たまひて（殿は手に取って御覧になって）、

「人恋ふるわが身も末になりゆけど、残り多かる涙なりけり」（和歌 41-18）

「余命少ないこの身にも、涙は残り多そうだ」（意訳 41-18）

*注に＜源氏の中将の君への返歌。「恋ふる」「涙」をそのまま用い、「君」は「人」、「果て」は「残り」と言い換えて返す。＞とある。「末に」「残り多かる」という逆説の面白さは分かり易いが、作者はその軽妙さ自体を示そうとしているのではないだろう。その軽妙さが殿の照れ隠しだという面白さ、という書き方かと思う。

と、書き添へたまふ（とその扇に書き添えなさいます）。

九月になりて九日（くぐわちになりてここぬか、重陽の日に）、*綿おほひたる菊を御覧じて（殿は庭の菊の着せ綿を御覧になって、こうお詠みなさいます）、　*「綿おほひたる菊」は「菊の被綿（きくのきせわた）」が＜中古、陰暦九月八日の夜、菊の花にかぶせてその露と香りとをうつしとった綿。翌日の重陽（ちようよう）の節句にその綿で身をなでると、長寿を保つといわれた。菊綿。着せ綿。菊の綿。＞と大辞林にあり、菊は薬草として長寿に資すという考えらしい。「風俗博物館」サイトの「六条院四季の移ろい」トピックの「長月」ページの「重陽」の菊花宴場面に「着せ綿」の展示画像があった。

「もろともにおきゐし菊の白露も、一人袂にかかる秋かな」（和歌 41-19）

「昔一緒に見た露も、今は一人で袂拭く」（意訳 41-19）

*注に＜源氏の独詠歌。「置き」「起き」の掛詞。「露」は「涙」を暗示する。『奥入』は「明くるまで起きゐる菊の白露は仮の世を思ふ涙なるべし」（古今六帖一）。『孟津抄』は「もろともに起きゐし秋の露ばかりかからむものと思ひかけきや」（後撰集哀傷、一四〇九、玄上朝臣女）を指摘。＞とある。「もろともに」は＜二人一緒に＞という意味らしい。が、「もろとも」は「死なば諸共」の語用の印象が強い所為か、私には＜巻き添えにする、強引に引き込む＞という語感がある。「もろ」は「諸・両・双」と漢字表記する接頭語で＜二つの、両方の、双方の＞または＜多くの、すべての＞または＜一緒の＞を意味する、と大辞泉にある。「両刃（もろは）」は＜両面刃＞だが、「両刃の刀」という言い方は＜相手も自分も諸共に傷付ける＞という意味だ。「どちらも」は＜いずれにせよ、どちらにしても＞であり、どの道＜逃げ場が無い＞という語感で、「もろ」には単に＜両方の、多くの＞以上に破滅感がある。是は現代語の語用、または私の個人的な印象に過ぎないもので、当時または元々は「もろ」は＜二人＞を特別な感慨無しに客観的に示す語だったのかも知れない。であれば、「諸共に起き居し」は＜共に寝起きしていた＞ことを淡々と説明する言い方、と取るべきだろうか。しかし私にはどうしても、執念深い言い方に聞こえる。そして、その印象が強過ぎて、「おきゐし」が菊が朝露を＜置いて居る＞ことと、其処に重陽の着せ綿を＜置いて居る＞ことを言う言葉遊びと、その風情を「秋かな」と味わう心の余裕が素直に持てない。やはり、下敷き歌の「露ばかりかからむ」という無念さの方が「もろともにおきゐし」に馴染む気がする。ただ、軽さにこそ深い悲しみが込められている、というのはアリかとも思うが。

［第二段　源氏、出家を決意］

神無月には（十月には）、おほかたも時雨がちなるころ（ほとんどの日が時雨がちで）、いとど眺めたまひて（いっそう所在無く部屋住みなさって）、夕暮の空のけしきも、えもいはぬ心細さに（夕暮れの空の景色の言い様も無い心細さに）、「*降りしかど（以前は時雨に是ほど泣ける事は無かったのに）」と独りごちおはす（と殿は古歌を一人つぶやきなさいます）。　*「降りしかど」は注に＜『源氏釈』は「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖ひづる折はなかりき」（出典未詳）。『大系』は「神無月いつも時雨は悲しきを子恋ひの森はいかが見るらむ」（為頼集）を指摘。＞とある。「袖ひづる」は「袖漬つる」で＜袖が涙で濡れる＞ということ、らしい。

雲居を渡る雁の翼も、うらやましく*まぼられたまふ。　*「まぼる」は＜見守る。見つめる。＞と古語辞典にある。ただ、此処では下の歌の「まぼろし」を呼ぶ語用でもあるらしく、実際に見ているものとは別のものを見て、見ようとして、憧れている、みたいな語感。「うらやまし」は一人身の寂しさから＜雁の群れが共に連れ立つ＞のを憧れた、のか。空を飛ぶ自由に憧れたのか。両方か。

「大空をかよふ幻、夢にだに見えこぬ魂の行方たづねよ」（和歌 41-20）

「雁が飛び交う秋の空、比翼の夢も今何づ処」（意訳 41-20）

*「大空を通ふ幻」は訳文に＜大空を飛びゆく幻術士よ＞とあって、是も長恨歌にある、王が幻術士に楊貴妃の霊魂を仙界に探させる、という 75 句から 120 句までの結びの話に基づく歌筋らしい。長恨歌では、幻術士は楊貴妃の魂を探し当てて、形見の螺鈿の箱と金の簪と共に「比翼の鳥」と「連理の枝」という玄宗皇帝と二人だけで一心同体を誓った言葉を王の許へ持ち帰った、という愛は国よりも重いみたいな歌趣となっている。が、殿と上との二人だけの愛

の言葉って何かあったっけ。「幻」は巻名にもなっているが、意訳は歌語より、上を偲ぶ歌意に沿ってみた。紫の上の可愛らしさと、源氏殿と築いた栄光との両方を印象付けた場面は、やはり十七年前の六条院へ引っ越した直後の秋の、秋好中宮との春秋争いが私には懐かしい。中納言の君を「うなゐ松におぼえたるけはひ」(一章三段)と見ていたらしい殿も同様だろう、と勝手に考えて置く。が、さすがに「大空を通ふ」とある歌なので＜連理の枝＞ではなく＜比翼の鳥＞に因んで置く。

何ごとにつけても(何を見聞きしても)、紛れずのみ(慰められず)、月日に添へて思さる(月日が経つほど殿は深く悲しみなさいます)。

*五節などいひて(十一月になると豊作感謝の五節舞などといって)、世の中そこはかとなく今めかしげなるころ(世の中が好況気分に浮かれている頃)、大将殿の君たち(大将殿がご子息たちで)、童殿上したまへる率て参りたまへり(今年童殿上なさった元服前の小さな子を引き連れて参上なさいました)。同じほどにて(年子なのか同じくらいの年付きで)、二人いとうつくしきさまなり(二人共にとても可愛い姿です)。　*「五節などいひて」は注に＜季節は十一月中旬へと推移。＞とある。「五節(ごせち)」は大辞林に＜奈良時代以後、毎年新嘗祭(しんじようさい)・大嘗祭(だいじようさい)の折に、その前後四日（一一月中(なか)の丑(うし)・寅(とら)・卯(う)・辰(たつ)の日）にわたって行われた、五節の舞を中心とする儀式行事。丑の日は舞姫が参入し、夜、帳台の試みが行われ、寅の日は清涼殿で殿上(てんじよう)の淵酔(えんすい)および夜は常寧(じようねい)殿で御前の試み、卯の日は舞姫の介添えの少女たちを御前に召す童女(わらわ)御覧、辰の日は豊楽殿(ぶらくでん)の前で、豊明(とよのあかり)の節会(せちえ)が催され、五節の舞が舞われる。天武天皇の代に始まるといわれ、平安時代には盛大に行われたが、のち大嘗祭の時のみとなり、室町時代には廃止された。ごせつ。＞とある。「新嘗祭」は＜天皇が新穀を天神地祇(ちぎ)に供え、みずからもそれを食する祭儀。古くは陰暦 11 月の中の卯(う)の日、明治 6 年（1873）以降は 11 月 23 日と定めて祭日としたが、昭和 23 年（1948）からは「勤労感謝の日」となり、国民の祝日となっている。にいなめさい。《季 冬》＞と大辞泉にある。豊作感謝だから大事で目出度い祭であり、「五節の舞」は祝宴の記念らしい。

御叔父の頭中将、蔵人少将など(母方の叔父に当たる藤原家の頭中将や蔵人少将などの貴公子たちが)、*小忌にて(新嘗祭の祭装束の小忌衣で)、青摺の姿ども(型抜き柄の藍染姿が)、きよげにめやすくて(すっきりとして好感があり)、皆うち続き(皆揃って)、もてかしづきつつ(その子たちを世話を焼きながら)、もろともに参りたまふ(大将と一緒に参上なさいます)。　*「小忌(をみ)」は「小忌衣(をみごろも)」のこと、らしい。「小忌衣」は＜物忌みのしるしとする清浄な上着。大嘗祭(だいじょうさい)・新嘗祭(にいなめさい)などに奉仕する小忌人(おみびと)や祭官などが装束の上に着る。白布に花鳥草木などの文様を青摺(あおず)りにし、右肩に赤ひもという赤黒 2 本のひもを垂らす。おみのころも。おみ。《季 冬》＞と大辞泉にある。「小忌人」は＜大嘗祭(だいじょうさい)・新嘗祭(にいなめさい)などの大祭に、小忌衣(おみごろも)を着て神事に奉仕する官人。おみ。＞とあるので＜神官の従者＞といった語感だろうか。一種の祭半纏みたいなもので、祭装束には違いないらしい。

思ふことなげなるさまどもを見たまふに(その屈託の無さそうな若者たちの表情を御覧になると)、いにしへ、あやしかりし*日蔭の折(昔に五節舞姫の妖しさに魅了された時の事が)、さすがに思し出でらるべし(殿にはさすがに思い出されなさったようです)。　*「ひかげ」は「ひかげのかづら」のことらしい。「日陰の蔓」は大辞林に＜ヒカゲノカズラ科の常緑多年生シダ植物。山地に自生。茎は地を這(は)って長く伸び、ところどころで叉状に分岐する。葉は短い線形。夏、枝先から細い花茎を直立し、淡黄緑色の胞子

嚢穂(ほうしのうすい)をつける。胞子は石松子(せきしようし)といい薬用にする。ヒカゲカズラ。カミダスキ。漢名、石松。＞とあり、また＜昔、大嘗祭(だいじようさい)などの神事に、冠の笄(こうがい)の左右に結んで垂れ下げた青色または白色の組糸。もと植物のヒカゲノカズラを用いたための称。ひかげかずら。かずらがけ。ひかげのいと。＞ともある。つまり「日陰の蔓」は＜新嘗祭の髪飾り＞で、古語辞典に＜五節の舞姫もこれをかざしとする。＞とあるので、「日蔭の折」は＜五節舞姫の舞姿を見た時＞ということなのだろう。注には＜語り手の源氏の心中を推測した叙述。筑紫の五節舞姫に逢ったことは「花散里」「須磨」「明石」「少女」の諸巻に回想されている。＞とある。須磨巻三章三段の大宰大弐が帰京する時に須磨を通り掛かり、娘の五節の君と光君が和歌贈答する場面は印象深い。二十六年前の秋のことだ。ただ、その時にも、またその前後にも、光君と筑紫五節との馴れ初めの記事は無かった、と思う。

「宮人は豊明といそぐ今日、日影も知らで暮らしつるかな」(和歌 41-21)

「豊作祝いの目出度さも、今の暮らしに似合わない」(意訳 41-21)

*注に＜源氏の独詠歌。「日光（ひかげ）」と「日蔭の蔓」の掛詞。『完訳』は「華麗な儀に入り込めぬ孤独を詠む」。＞とある。「豊明の節会(とよのあかりのせちゑ)」は＜奈良時代以降、新嘗祭(にいなめさい)の翌日豊楽殿において天皇が新穀を食し、群臣に膳をもてなす宴会。五節の舞などが行われた。＞と大辞林にある。「かげ」という日本語は＜揺らぎ＞の概念を捉えているようで、それを科学的に定義する意味はありそうな気がするが、私には難し過ぎて今のところは厄介だ。特に「日影」と「日陰」を掛ける語用には付き合いたくない。

「*今年をばかくて忍び過ぐしつれば(この一年をこのように自制して過ごして来たのだから)、今は(今はもう)」と、世を去りたまふべきほど近く*思しまうくるに(と、出家なさって良い時が近いと予定なさるにつけても)、あはれなること(殿は上への思い出が)、尽きせず(尽きません)。

*「今年をばかくて忍び過ぐしつれば」について、注には＜『集成』は「今年一年をこうして出家を我慢して過したので、もういよいよ俗世をお捨てになる時期が近づいたとお心積りなさるにつけ」。『完訳』「傷心に堪えて一歳を過した。出家を留保してきたことをさす」「今年一年間はこうして悲しみをこらえて過してきたのだから、いよいよ俗世をお捨てになる時期が近づいたことを覚悟なさるにつけても」と注す。＞と先ずは諸注を参照提示した上で、以下は渋谷教授自身の指摘なのだろうか＜(上記他注は)いずれも地の文に解すが、「今年をば」から「今は」は源氏の心中文、源氏の思惟過程であろう。「世を去り給ふべきほど近く思しまうくるに」は地の文。「近く思しまうくる」は「近くに思しまうくる」の意であろう。＞とある。敬語遣いから見て、妥当な注かと思う。が、いずれにせよ文意は出家の決意のようだ。その文意とは、今や一周忌が過ぎた忌明けと成り、忌中の出家では無いので、妻を失った気弱さからの決心ではなく、信心からの出家だと言い張れる、みたいなことだろうか。そういう構文に見えるが、だとしたら、この文意というか文旨は本当に分かり難い。何度もノートして来た気がするが、修行生活に入る理由など、人の悩みは千差万別なのだから、経緯を記す意味はあっても、その是非は問題に成らない、と私には思えてならない。信心を鍛え、善行を積む、そのことこそが修行なのであり、それに打ち込む姿勢は問題かも知れないが、修行に入る前に決したことに拘る意識なら入信する意味は無いのではないか。出家の何たるかなど私には分からないが、時機を計る、というのは基本的に都合の良し悪しの問題であって、それは信心とは違う次元の現世利益の話、に私にはどうしても見える。　*「思ひ設く」は＜予定する＞。

やうやうさるべきことども(次第に出家の準備で)、御心のうちに思し続けて(殿は気持ちの整理をし続けなさって)、さぶらふ人びとにも(仕える女房たちにも)、ほどほどにつけて(身分に応

じて)、物賜ひなど(記念品の下げ渡しなど)、おどろおどろしく(大仰に)、今なむ限りとしなしたまはねど(是を最後ということには為さらないが)、近くさぶらふ人びとは(側近女房たちは)、御本意遂げたまふべきけしきと見たてまつるままに(それを殿が出家なさる印しと拝し申し上げて)、年の暮れゆくも心細く(年が暮れ行くのも心細く)、悲しきこと限りなし(悲しいことこの上ありません)。

[第三段　源氏、手紙を焼く]

*落ちとまりてかたはなるべき人の御文ども(捨て残って見苦しくなりそうな女からの手紙類を)、*破れば惜し(破るのは惜しい)、と思されけるにや(と殿はお思いになってか)、すこしづつ残したまへりけるを(少しづつ残していらっしゃったのを)、もののついでに御覧じつけて(他の文書整理の際に目に留められなさって)、破らせたまひなどするに(女房に破り捨てさせなさりなどしたが)、かの須磨のころほひ(かの須磨退去の折に)、所々よりたてまつれたまひけるもある中に(各所の馴染みの女たちからお寄越し申しなさったものもある中で)、かの御手なるは(紫の上からの手紙は)、ことに結ひ合はせてぞありける(特別に一束にまとめてありました)。　*「落ちとまる」は枯葉が＜抜け残る＞とか涙が＜こぼれ留まる＞みたいな言い方だろうか。手紙なら＜捨て残る＞だろうか。参照歌引用の指摘も無く、掛詞にもなっていなさそうだが、だとすると、何故こんな分かり難い言い方をするのか不思議だ。　*「破る」は「やる」の読みで、他動詞なら四段活用で＜やぶる、引き裂く＞と古語辞典にある。古語で「やぶる」と言うと＜壊す、負かす＞の意らしい。「破れば惜し(やればをし)」は注に＜『異本紫明抄』は「破れば惜し破らねば人に見えぬべし泣くなくもなほ返すまされり」（後撰集雑二、一一四四、元良親王）を指摘。＞とある。「返済ます(かへすます)」は＜返し終える＞。

みづからしおきたまひけることなれど(ご自分でそうなさっていらっしゃった事だが)、「久しうなりける世のこと(昔のことだ)」と思すに(と殿はお思いになり)、ただ今のやうなる墨つきなど(真新しい手紙のように見える墨の色などを)、「げに*千年の形見にしつべかりけるを(まるで千年の形見に出来そうだが)、見ずなりぬべきよ(出家すれば、見なくなってしまう物だ)」と思せば(とお思いになれば)、かひなくて(残しておいても意味が無いので)、疎からぬ人びと(ごく親しい女房の)、二、三人ばかり(に、さんにんばかり)、御前にて破らせたまふ(目の前で破り捨てさせなさいます)。　*「ちとせのかたみ」は注に＜『異本紫明抄』は「書きつくる跡は千歳もありぬべし忘れず偲ぶ人やなからむ」（出典未詳）「かひなしと思ひなけちそ水茎の跡ぞ千歳の形見ともなる」（古今六帖五、文）を指摘。後者の和歌が引歌として指摘されている。＞とある。「かひなしと思ひなけちそ」は＜意味が無いと思って消して下さい＞。「水茎(みづぐき)」は＜濡らした筆＞で「水茎の跡」は＜筆跡＝手紙＞、とのこと。失恋の歌っぽい。

いと(それはもう)、かからぬほどのことにてだに(これほどのことでなくても)、過ぎにし人の跡と見るはあはれなるを(亡くなった人の筆跡を見るのは感慨深いが)、ましていとどかきくらし(まして故上の手紙にはいっそう涙に暮れて)、それとも見分かれぬまで(それと見分けが付かなくなるほどに)、降りおつる御涙の水茎に流れ添ふを(殿の溢れる涙で手紙の文字が滲むのを)、人もあまり心弱しと見たてまつるべきが(女房の目にもだらしないと拝し申しそうなのが)、かたはらいたうはしたなければ(極まり悪く気が引けたので)、押しやりたまひて(殿は上の手紙を女房の方へ押し遣りなさって、こう言い切りなさいます)、

「死出の山越えにし人を慕ふとて、跡を見つつもなほ惑ふかな」（和歌 41－22）

「いくら恋しい人だって、後を追うのは躊躇する」（和歌 41－22）

*注に＜源氏の独詠歌。『河海抄』は「死出の山ふもとを見てぞ帰りにしつらき人よりまづ越えじとも」（古今集恋五、七八九、兵衛）「死出の山越えて来つらむ時鳥恋しき人の上語らなむ」（拾遺集哀傷、一三〇七、伊勢）「いにしへの跡を見つつも惑ひしを今行く末をいかにせよとぞ」（宇津保物語、菊の宴）を指摘。＞とある。「死出の山（しでのやま）」は「文化用語の基礎知識」サイトの「仏教用語編」カテゴリの項目に＜衆生は死後、現世に別れを告げて別の世界へと行く。この世界は現世と来世の間の世界であり、この世界において来世の行き先を決める裁判が行なわれる。この裁判に要する時間は 49 日間とされ、法事でも馴染み深い日数である。そしてこの間を冥土の旅という。この冥途の旅は、まず山脈から始まるとされる。死者が冥土へ旅立つ起点となる山々であることから、死出の山と呼ばれるようになった。この山道は非常に険しく、距離は 800 里あるとされる。また僅かに星の光があるのみで、周囲は真っ暗であるとされる。死者はこの道を一人で七日間歩き、つまり初七日に、まず秦広王（しんこうおう、不動明王）によって最初の裁判を受ける。この裁きを受けた後、いよいよ三途の川を渡ることになる。＞とある。死後の世界の最初の試練、みたいな印象だが、死後も試練が続くという考えは、人を組織立てて導く際に＜恐怖が有効だ＞という認識に基づいた発想に思えて興味深い。だというのに、引用歌として参照指摘されている古今集の歌は、例によって「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページによれば、この歌には「病をして具合が悪かった時、親しい仲であった人が見舞いにも来ず、治ってから見舞いをよこしたので詠んで送った歌」との詞書があり、そういう「つらき人よりまづ越えじ（冷たい人より先に死にたくない）」という皮肉、というか私には冗句に聞こえるが、な詠みっぷりとなっていて、「死出の山」を出汁にしている趣が軽妙だ。

さぶらふ人びとも（控える女房たちも）、まほにはえ引き広げねど（上の手紙をまともに広げて読むことは出来ないが）、それとほのぼの見ゆるに（その筆跡が窺えると）、心惑ひどもおろかならず（懐かしさに動揺します）。

*この世ながら遠からぬ御別れのほどを（死別ではないものの、然程には遠くもない須磨への御別れを）、いみじと思しけるままに書いたまへる言の葉（不安にお思いになりながらお書きになった若い日の紫の上の和歌に）、げにその折よりもせきあへぬ悲しさ（上が故人となった今こそ本当に、その時以上の悲しさが表われて）、やらむかたなし（何とも遣る瀬無い）。　*「この世ながら遠からぬ御別れのほど」は上文に「かの須磨のころほひ」とあったので、その時の「御別れ」のことらしい。が、「この世ながら遠からぬ」は分かり難い。「この世ながら」は「遠からぬ」に順接で掛かって＜生き別れなので死に別れほどは遠くない＞という意味なのだろうか。むしろ、「この世ながら」は＜死に別れではないものの＞で「思しける」に逆説で掛かると読む方が、「げにその折よりも」という言い方に紫の上が死去した今こその悲しさを大きく示せるので、そう読む。

いとうたて（読み返して急に感極まって涙し）、今ひときはの御心惑ひも（最後の決心が鈍るのも）、女々しく人悪るくなりぬべければ（女々しく見っともないことになってしまうので）、よくも見たまはで（殿は上の手紙をしっかりとは読み返しなさらずに）、こまやかに書きたまへるかたはらに（丹念に書いていらっしゃるその文面の端に）、

「かきつめて見るもかひなし藻塩草、同じ雲居の煙とをなれ」（和歌 41-23）

「読まなけりゃ黒塗りしたも同じこと」（意訳 41-23）

*注に＜源氏の独詠歌。「藻塩草」は手紙を譬喩する。「煙」と縁語。＞とある。「塩焼き」は須磨や明石の海人の仕事。此処で言う「藻塩草」は＜流浪時代の手紙＞を意味しているのだろう。「藻塩」は「藻塩の会」サイトのビデオの説明が秀逸だ。海水に浸しては天日乾燥するのを何度も繰返した海草の玉藻を、相当に塩分濃度が高まった所で焼く。その灰を炭ごと掻き集めて（かきつめて）、更に海水を掛けて布で漉して、瓶で煮詰めたものが「藻塩」とのこと。「かきつめて見るもかひなし藻塩草」は漉す前の黒い灰をそのまま言い表しているようだ。目を瞑って無理やり諦めを付けようとする＜黒＞だろうか。公文書公開の炭潰しとは違う趣向なのだろう。で、「藻塩草」を＜かきつめる＞ことから「書く」に洒落て＜随筆や筆記などのこと＞を示すらしい。「けぶり」は＜塩焼きの煙＞。「雲居の煙」は＜上の荼毘＞。「同じ～なれ」で思い切れたのか。

と書きつけて、皆焼かせたまふ（と書きつけて、皆焼かせなさいます）。

［第四段　源氏、出家の準備］

「*御仏名も（六条院での仏名会も）、今年ばかりにこそは（今年限りだな）」と思せばにや（とお思いになる所為か）、常よりもことに（例年よりも特に）、*錫杖の声々などあはれに思さる（錫杖の唱和を殿は印象深くお思いなされます）。行く末ながきことを請ひ願ふも（仏名会で僧たちが殿の長寿を諸仏に請い願うのも）、仏の聞きたまはむこと（仏が如何お聞きになることかと）、*かたはらいたし（出家を決意した殿には気恥ずかしい）。　*「御仏名（おおんぶつみゃう）」は六条院での「仏名会（ぶつみゃうゑ）」のことらしい。「仏名会」は＜一二月一九日より三日間仏名経によって三世の三千の仏の名前を三日間唱えて、罪の消滅を祈る法会。宮中でも室町時代まで恒例の行事として清涼殿で行われた。御仏名。＞と大辞林にある。「仏名経（ぶつみゃうきゃう）」は＜諸仏の名前を集めた経典。五種類が知られており、三劫三千諸仏名経は仏名会で読誦（どくじゆ）される。＞とある。　*「錫杖の声々」は仏名を唱和する度に鳴らす錫の音だろうか。仏名会で四個法要（しかのほふえう）という様式で声明（しゃうみゃう、仏歌）を上げることがあるような記事も散見し、「四個法要」は＜大法会の４種の儀式作法。梵唄（ぼんばい）・散華（さんげ）・梵音・錫杖（しゃくじょう）の称。＞と大辞泉にある四曲を言うらしく、であれば、「錫杖の声々」は＜錫杖を歌う声＞かもしれない。が、何れにせよ、私には何のことか分からないし、深入りする気も無い。　*「かたはらいたし」は＜極まりが悪い、みっともない、苦々しい＞など相応しくない事態を言い表す語のようだが、此処では＜気恥ずかしい＞くらいだろうか。注には＜『完訳』は「出家を志す身に対して、長寿を祈願することになるから」と注す。語り手の批評の語句。＞とある。出家者は在るが儘を淡々と受け入れて落ち着いた姿勢を崩さないもの、ということだろうか。長命も短命も望まなければ恐れもしないのが修行者のあるべき姿なのに、長命を望むとは「かたはらいたし」ということか。在るがままで良いなら、今の立場での役割を淡々と果たせば良いのだから、別にこんな「かたはらいたし」をわざわざ言わなくても良いような気もするが、そんなことを言い出したら何も言う事が無くなってしまうのかも知れない。何も言う事が無くなるのが近付いている、ということだろうか。

雪いたう降りて、まめやかに積もりにけり（雪が大降りで厚く積もりました）。導師のまかづるを、御前に召して、盃など（導師が帰ろうとするのを殿はお部屋に呼び寄せて御酒の親しい交わりなど）、常の作法よりもさし分かせたまひて（いつもの労いよりも念入りになさって）、ことに禄など賜はす（特別な祝儀の布地などを下げ与えなさいます）。年ごろ久しく参り（長年に渡って六条院の法事に参じて）、朝廷にも仕うまつりて（宮中法要にも仕え申し上げて）、御覧じ馴れた

る御導師の(見慣れなさった御導師の)、頭はやうやう色変はりてさぶらふも(頭が次第に白くなって読経を勤めているのも)、あはれに思さる(殿は感心なさいます)。例の、宮たち、上達部など、あまた参りたまへり(この日の仏名会にもいつものように王族方や高官たちが多数参列なさいました)。

梅の花の、わづかにけしきばみはじめて雪にもてはやされたるほど、をかしきを(梅の花が少しほころび始めて雪化粧しているのが良い風情で)、御遊びなどもありぬべけれど(興趣ある楽器演奏などあって良さそうな所だが)、なほ今年までは、ものの音もむせびぬべき心地したまへば(やはり今年いっぱいは楽器の音も湿りがちな気分でいらっしゃるので)、時によりたるもの(折柄の歌詠みで)、うち誦じなどばかりぞせさせたまふ(吟詠などだけをさせなさいます)。

まことや(それで)、導師の盃のついでに(導師に盃をお与えになった時の殿の歌は)、

「春までの命も知らず、雪のうちに色づく梅を、今日かざしてむ」(和歌 41-24)

「健気な梅の雪化粧、あなたの髪にも似合いそう」(意訳 41-24)

*「てむ」は＜～てみよう＞だが、源氏殿が白髪の導師に詠んだ贈歌だから、「雪のうちに」は「色づく梅」の目出度さを＜導師の白髪に＞「今日かざしてむ」のも一興、と洒落込んだのだろう。「春までの命も知らず」は「色づく梅」についてはその健気さを言っているが、導師に対しては＜今の内に飾って置かないと手遅れになっては甲斐も無い＞という揶揄に聞こえる。いや勿論、労いの賛辞は伝わっている前提でだろうが。

御返し(導師の御返歌は)、

「千世の春、見るべき花と祈りおきて、わが身ぞ雪とともにふりぬる」(和歌 41-25)

「殿の変わらぬ目出度さに、引き換え私の老けたこと」(意訳 41-25)

*注に＜導師の返歌。源氏を「花」と見立て、その長命を祈る。「降り」「古り」の掛詞。＞とある。この贈答は仏名会に際しての祝言挨拶として交わされているので、形式としては贈答でも、歌意の基本は個人的な応対ではなく、場の折柄として全体が慶事を喜ぶ唱和の歌会の趣きとなっている。「千世の春」は正にその主旨に添った主題として歌い上げるべき目出度い言葉だ。殿をその「千世の春」に似合いの「見るべき花と祈りおきて」と持ち上げて、導師自身は「わが身ぞ雪とともにふりぬる(こっちは白髪で老けました)」と卑下するところなんぞは、太鼓持ちも真っ青ってなヨイショだが、何だか定型の使い回した褒め口上にも聞こえる。芸が細かいと思ったのは、殿の贈歌の三節が「雪のうちに」という字余り破調だったのに合わせてか、導師の三節も「祈りおきて(祈って置いたものの)」の六文字に詠んでいるところだ。

人びと多く*詠みおきたれど、もらしつ(他にも参列者たちが歌を多く詠み置きましたが、聞き漏らしましたので)。　*「詠みおきたれど」には「たまふ」の敬語遣いが無いが、「人びと」は「例の、宮たち、上達部など」なのだろう。「漏らす」は＜抜け落ちる＞。「書き漏らす」なら＜省筆する＞、「聞き漏らす」なら＜聞き損なう＞。男たちの公然の場での歌詠みなので、女房語りとしては＜省筆する＞と我を張るよりは＜聞き損なう＞と至らなさを演出した言い方のほうが馴染む気がする。

*その日ぞ(殿はこの仏名会の日になって)、出でたまへる(喪中以来初めて人前に姿をお出しなさったのです)。　*「その日ぞ」の「ぞ」という限定強調の係助詞を受けて文末は「たまへる」の連体形で結ばれる文型。注には＜この仏名の日に、源氏は、紫の上薨去以来初めて人前に姿を現した。『一葉抄』は「双紙の詞也」と指摘。＞とある。

御容貌(その御姿は)、昔の御光にもまた多く添ひて(昔の素晴らしさにもまた一段と増して)、ありがたくめでたく見えたまふを(尊く喜ばしくお見えになるのを)、この古りぬる齢の僧は(この付き合いの長い老僧は)、あいなう涙もとどめざりけり(訳も無く涙が止められないのでした)。

年暮れぬと思すも、心細きに(大晦日の日を迎え、この一年も終わるのかとお思いになれば、そのあっけなさに心細くなる殿は)、若宮の(御孫の若宮が)、

「*儺やらはむに(夜の厄払いの鬼退治では)、音高かるべきこと(鬼を追う大きな音を立てるのに)、何わざをせさせむ(どうすれば良いんだろう)」　*「儺やらふ(なやらふ)」は＜「追儺(ついな)」をする。＞と古語辞典にある。「追儺」は＜大みそかの夜に行われる朝廷の年中行事の一。鬼に扮(ふん)した舎人(とねり)を殿上人らが桃の弓、葦の矢、桃の杖(つえ)で追いかけて逃走させる。中国の風習が文武天皇の時代に日本に伝わったものという。江戸時代の初めには廃絶したが、各地の社寺や民間には節分の行事として今も伝わり、豆まきをする。鬼やらい。鬼追い。鬼打ち。＞と大辞泉にある。大晦日の話になっているようなので、そのことを「年暮れぬと思す」の文頭に遡って補語する。

と、走りありきたまふも(と言って走り回りなさるのも)、「をかしき御ありさまを見ざらむこと(出家すれば、この可愛い御姿を見ないことになってしまうのか)」と、よろづに忍びがたし(と何につけても涙もろい)。

「もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに、年もわが世も今日や尽きぬる」(和歌 41-26)

「ふと気が付けば大晦日、今日は確かに最後の日」(意訳 41-26)

*注に＜源氏、物語中の最後の詠歌。辞世の歌。『河海抄』は「もの思ふと過ぐる月日も知らぬまに今年は今日に果てぬかと聞く」(後撰集冬、三〇七、藤原敦忠)を指摘。＞とある。「辞世の歌」とは言えないだろうと思ったが、「わが世も今日や尽きぬる」を出家を決意して世俗を捨てるという意味では、栄華人生を終える歌、ではあるのかも知れない。が、それにしては、当歌は藤原敦忠(ふぢはらのあつただ、906-943、平安中期の歌人。三十六歌仙の一人。時平の子。従三位権中納言。恋歌を得意とし、管絃にも優れた。[大辞林])の歌の本歌取りというほどのこともなく、いやもっと親しく問答しているような詠み方で、その脱力感が出家に似合っている、としても、詩歌管弦に長じたと語られて来た源氏殿にしては戯言に過ぎるようにも見える。此処に来ての、女手は所詮は男手に適わないとでも言って舌を出す作者の計算高さ、までもつい詮索したくなる。単に、漫然と一年を過ごした感想、がこの歌を記す意図とも思えないが、歌自体にはその空虚さが漂う。

*朔日のほどのこと(元旦の祝飾りを)、「常よりことなるべく(例年よりも豪華に)」と、おきてさせたまふ(と殿は家人に言い付けなさいます)。親王たち(みこたち、王族の新年参賀者や)、*大臣の御引出物(高官たちへの記念品や)、*品々の禄どもなど(それ以下の身分の参賀者へのそれぞれの分相応の布地配給などは)、*何となう思しまうけて(何の不足も無く周到に用意なさっ

ていた)、とぞ(とか)。　*「朔日(ついたち)」は此処では＜元旦＞。　*「おとど」は此処では＜公卿たち＞の語用だろう。　*「しなじな」は此処では＜各階級の参賀者＞。　*「なにとなし」は＜特別なことも無い＞という言い方のようだが、「思ひ設く」が＜心積もりをする＝配慮して用意する＞だから、この「何となし」は＜何一つと不足の無い＞という語用なのだろう。

(2012 年 12 月 14 日、読了)